

## 第2回みどりGXアワード 農業部門エントリー一覧

No.	名称	活動概要	種別
1	J A 晴れの国岡山	水稲高温耐性品種「にじのきらめき」の部会を作り、作付けを拡大	5月 登壇
2	J A 常陸	常陸大宮市と連携し、学校給食向けを中心に有機農業を推進	6月 登壇
3	J A 水戸	有機農業研究会を設立。個人ではハードルが高いため、J A が支援	6月 登壇
4	J A やさと	管内2つの研修農場で有機栽培の新規就農者を育て、生産部会への加入につなげる	6月 登壇
5	J A 東とくしま	「BLOF理論」に基づき有機農業を推進。低たんぱくなど良食味と高収量を両立	6月 登壇
6	井出トマト農園 (神奈川県藤沢市)	ドローンでハウス屋根に遮光剤散布など高温対策。夏場は無理のない作業計画を立てる	7月 登壇
7	近藤恵さん (福島県二本松市)	パネル下でブドウなどを生産。農業者主体で営農とエネルギー生産を両立し脱炭素に貢献	8月 登壇
8	湯ノ口絢也さん (滋賀県東近江市)	水稲や野菜の高温対策に苦慮。対策資材を積極的に試すが生産コストが増える実態を指摘	8月 登壇
9	J A ぎふ	みどり戦略部を設置。消費者目線の栽培基準「ぎふラル」、有機の実験農場など展開	8月 登壇
10	J A 岩手ふるさと	管内50戸、約1150ヘクタールの中干し延長を支援。水稲栽培部会全員がみどり認定	9月 登壇
11	北総クルベジファーマーズ (千葉県四街道市)	バイオ炭を施用。農産物の販売や、クレジット販売先企業の社員食堂での農産物提供も	9月 登壇
12	坪口農事未来研究所 (兵庫県豊岡市)	コウノトリ育む農法を実施。他にソーラーシェアリング、リジェネラティブ農業も	11月 登壇
13	農事組合法人カミナマイ (栃木県小山市)	コウノトリ定着に向け冬季・夏季湛水や有機栽培を推進。学校給食への有機拡大も	11月 登壇
14	J A 越前たけふ コウノトリ呼び戻す農法部会	コウノトリ呼び戻す農法を展開。有機米の作付けが拡大中	11月 登壇
15	ただかね農園 (埼玉県秩父市)	地域の有機質廃棄物の堆肥で循環型農業を実践し、観光農園の来場者やSNSで発信	応募

※農業、連携・支援の両部門に該当するエントリー

16	兵庫県豊岡市・J A たじま	コウノトリの野生復帰に向け、農薬の削減や冬期湛水などによる「コウノトリ育む農法」を普及	11月 登壇
----	----------------	---	-----------

## 第2回みどりGXアワード 連携・支援部門エントリー一覧

No.	名称	活動概要	種別
1	北海道旭川市・大阪府泉大津市	オーガニックブリッジとして、遠隔地にある生産地と消費地の連携でオーガニックビレッジ宣言	4月 登壇
2	京都府亀岡市	オーガニックビレッジ宣言をし、有機農業の学校や「有機農業団地」などを展開	4月 登壇
3	大分県臼杵市	同宣言。化学肥料・化学農薬不使用の独自認証「ほんまもん農産物認証制度」を推進	4月 登壇
4	栃木県小山市	コウノトリ定着に向け冬期・夏期湛水や有機栽培を推進。学校給食への有機拡大も	11月 登壇
5	福井県越前市	コウノトリ呼び戻す農法を展開。有機米の作付けが拡大中	11月 登壇
6	ビオセボン・ジャパン	オーガニック専門スーパーを展開。生産者との継続的な関係を重視し、安定供給を目指す	12月 登壇
7	J A全農・J A全農福島	生産部会の「みえるらべる」取得を支援。福島県本部では、J Aへの声掛けや申請支援も	12月 登壇
8	ヨシケイグループ	ミールキットの受注生産で食品ロスを削減。再配達防止の施策でもCO2削減に貢献している	応募
9	NOUKANO株式会社	ケールを中心に規格外農産物を買取・加工。食品ロス削減と地域資源の高付加価値化を推進	応募
10	福岡県大木町	生ごみを処理する過程で作られる液肥で農産物を生産し、地元で消費する循環型農業を確立	応募

## 第2回みどりGXアワード 次世代・若手部門エントリー一覧

No.	名称	活動概要	種別
1	愛知県立安城農林高等学校 土壌研究研修班	ミニトマトの廃棄ロスを大幅に削減した。加温方法の改善でハウス内の急激な温度上昇を抑制し、裂果を削減。訪問販売による売れ残りの削減、規格外品を活用した新メニュー開発、裂果果実の採卵鶏飼料への利用にも取り組んだ。販売量の倍増と廃棄量の7割削減で、10キロ当たりの温室効果ガス排出量は半減	応募
2	鹿児島県立種子島高等学校 生物生産科	基幹産業や伝統文化の次世代への継承を目指し、有機農業でサトウキビを生産する地元の「沖ヶ浜田黒糖生産協同組合」で体験学習を実施	応募
3	一般社団法人トコサ	開発した地産地消プラットフォーム「トコサ」（アプリを通じ地場農産物を予約購入、地元の拠点で受け取れるサービス）は地産地消により食品輸送の温室効果ガスを削減、予約制のため食品ロスも削減する。生産者の利益率は高く、受け取り拠点に人が集まるため地域の賑わいに貢献。開発者が10～20代。	応募
4	岡山県立高梁城南高等学校 農業クラブ	耕作放棄地でCO <sub>2</sub> 吸収能が高いモリンガの栽培実証、廃棄花を用いたアクセサリー販売、校内・干潟の生物調査、生態系を取り上げた高校生向けバスツアーなどを実施、地域課題の解決にかかる多様な活動をしている。「稼げる環境保全モデル」を目指す。	応募
5	福井県立坂井高等学校 食農科学科農業コース草花班サ スティナチーム	絶滅危惧種の越前大文字草とアゼオトギリの保全。雑草とされているアゼオトギリをジャンボタニシが忌避する可能性の研究も行っている	応募
6	宮城県農業高等学校	水稻の減肥や水質保全と収量確保を両立し、気候変動対策にも貢献する「深層元肥」法を開発。根の特性を利用し、肥料を通常より10センチ下に配置することで、肥料使用量を3分の1に、窒素流出量を8割削減。収量は15%増え、地中の温度差による冷却効果で乳白米は5.5ポイント減	応募